OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	中国明清期の「没有」比較文と「不比」文
Author(s)	王, 周明
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2017, 2016, p. 1-10
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/62087
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中国明清期の「没有」比較文と「不比」文

王　周明

1. はじめに

これまでに、中国語における「没有」比較文（X 没有 YZ：小张没有小李高。[張さんは李さんほど高くない。]）と「不比」文（X 不比 YZ[①]：小张不比小李高。[張さんは李さんより高いわけではない。]）について対照比較を行った先行研究は、現代中国語のものに限定していた。その大体のやり方も共通しており、先ず予めこの二つの文型を比字文（X 比 YZ：小张比小李高。[張さんは李さんより高い。]）の二つの否定式と定め、それから「没有」比較文を「不比」文の対照的な引き立て役にして、後者の語用論的機能に焦点を当てて議論を展開する。言い換えると、両者に対する研究者達の従来の態度や扱い方はそもそも異なっているように思われる。

意味構造において、「不比」文が「没有」比較文よりずっと複雑な故、中国語教育の現場では、通常教える側は「不比」文をできるだけ触れようとせずに、負の差比を表す「没有」比較文のみを正の差比を表す比字文の否定式として説明を行っている。但し、両者の明らかに対称とは言えない形式は、学習側にとって正確な理解または記憶は間違いなく困難になる。一方、中国語の史的変遷の中で、もし初めから「没有」比較文を比字文の否定式と見なしていれば、言語発展の事実に違反する完全な過ちになってしまう。本研究は、中国語史の視点から「不比」文と「没有」比較文との関係を整えてみるものである。明清期を考察対象とするのは、他でもなく、これまでに見つかったこの二種類の比較文の早期用例は、いずれもこの時期の白話小説によるものだからである。

2.「没有」比較文

2.1. 大まかな成立プロセス

王周明 2006 は「有」字比較文の成立について述べた。当時の論述重点は肯定式に置いていたが、その結論と照り合わせて改めて「没有」比較文の成立プロセスを考察すると、その中に含まれる、順を追って一歩一歩進めるという発展関係をなお一層明らかに示すことが出来ると考えられる。

「没有」比較文およびそれと関連性を有する幾つかの文型、その出現時期の先後順は大体以下の通りである。「有」字測量文（例 1）⇒比擬を含意する「有」字比較文の雛形（例 2）⇒「没有」比較文（例 3）。

1） 这井是砖甃的井，至小有二丈深。（古本老乞大）
[この井戸は煉瓦と石畳でできた井で、少なくとも二丈の深さがあります。]

2） 三清殿上有许多供养：馒头足有斗大，……。（西游记：44 回）
[三清殿には沢山の供え物があるぞ、饅頭はたっぷり一斗升ほどの大きさでな、…]

3） 便是房下们也没这大娘子一般儿风流。（金瓶梅：3 回）

［女房達さえもこの奥さんほどの色っぽさがないな。］

今日の同比を表すと広く認められている「小张有小李（那么）高。［張さんは李さんほどの高さがある。］」のような、比擬の意味合いを完全に排除する典型的な肯定式の「有」字比較文は、その出現はさらに遅くなったと推測できる。何故ならば、既に調査済みの明清期の文献には、関連性のある用例が未だに一つも見当たらないからである。故に、筆者は以下のように推論している：「没有」比較文は否定要素の介入によって、その比擬の意味合いを兼ねる確率は肯定式の「有」字比較文より断然低くなっており、早期のものは甚だしく数的にゼロに近い。しかし、こうした状況は後日になって重要なきっかけとして、却って典型的な肯定式の「有」字比較文が成立する助力となっていただろう。

上記の考察に基づいて石毓智・李讷 2001 を改めて見ると、そこで述べられた、「没有」比較文の出現の意味は、それまでの「不若/不似」比較文に対して、ただの語彙的な交替を行ったことにすぎない、という見解は明らかに不適切だと断言できる。

2.2. 主な文法特徴

「没有」比較文の出現時期は恐らく明代以前に遡ることが難しいだろう。前述の例 3 をも数に入れて数えると、これまでに見つかった最も古い用例は『金瓶梅』の中の 4 例[②]である。

4） 只爱你这两只白腿儿，就是普天下妇人选遍了，也没你这等柔嫩可爱。（75 回）
［ただお前のこの二本の白い足が大好きだ。世界中の女を遍く選んだとしても、お前のように柔らかくて可愛いのはないのよ。］

5） 你还不知三官娘子生的怎样标致，就是个灯人儿也没他那一段风流妖艳。（77 回）
［旦那様はまだ三官の奥さんがどんなに器量よしかご存じないでしょう。たとえ影絵人形でも彼女ほどの色っぽさや艶やかさはありませんよ。］

6） 糖肥皂那有这等好吃。（第 67 回）
［砂糖漬けのサイカチがこんなに美味しいわけがない。］

これらの例 3～6 には一つの共通点がある：Z に用いられる「风流／柔嫩可爱／风流妖艳／好吃」は全て性質や状態を表す、量とは無関係の形容詞で有り、しかも全員がその前に「一般儿／这等／那一段」というような程度を示す語句が共起している。こうした状況だけによれば、これらの「没有」比較文は現代中国語のものより条件が厳しいように見えるが、同時期の文献中、『金瓶梅』にしか用例が存在していなかったため、こうした共通点は当時において普遍性を有するや否やはなお不明である。

一方、清代の『儒林外史』と『紅楼夢』になると、例 7～10 に示されるように、『金瓶梅』に見られた上述のような「没有」比較文の共通的な特徴には変化が現れた：「大」の Z に用いられる形容詞としての仲間入りは、量との関係有無は何れも宜しいとなってきたことを意味する。また、「一般儿／这等／那一段」のような程度を示す語句が出現しなかった点も、程度を示す語句との共起はこれまでのように重要でなくなったことを意味している。

それ故、この時期の「没有」比較文はすでに現代中国語のものの使用状況と大きいな違いはないと認めるべきであろう。

7） 昨日我在对门葛来官家，看见他相公娘买了一幅绣的“观音送子”，说是买的姑娘的，真个画儿也没有那画的好！（儒林外史：41 回）
［昨日私は向かいの葛来官さんのお宅で、奥さんがお買いになった「子授け観音」の刺繍を見せて頂きました。お嬢さんのを買ったのだとおっしゃっていましたがね、本当の絵でもあれほど上手くは描けませんよ。］

8） 他这个炮还没有我们老人家辕门的炮大。（儒林外史：42 回）
［彼のこの大砲はまだ親父の営門の大砲ほどでっかくはないのだ。］

9） 实在画儿上的也没他好看。（红楼梦：52 回）
［全く、絵に描いたものでも彼女ほどの綺麗じゃないわよ。］

10）探春道：“……你看他那小园子比咱们这个如何？”平儿笑道：“还没有咱们这一半大，……”（红楼梦：56 回）
［探春は言う「…あの小さな花園とうちのこれと比べ、あなたはどう思う。」平児は笑いながらいう「こちらさまの半分ほどの広さもなく、…」］

2.3. 意味パターン

早期の「没有」比較文において、Z は既に積極的な意味の形容詞を使用する傾向を見せており、「没有」は「有」が「領有する」という基本義より「達する」という意味を派生したという助けを借りて、とっくに「達していない」という派生意味を有するようになった。従って、負の差比を表すこの文型の意味パターンを「X は Y の水準 Z に達していない」にまとめることができる。更にこうすると、ある意味では「X を否定して Y を肯定する」という意味パターンを含むことが可能になる。例 8、10 はこの一点において特に目立てている。例 8 の「彼のこの大砲の大きさは親父の営門の大砲の水準に達していない」は言い換えると、「彼のこの大砲は小さい、親父の営門の大砲は大きい」を表し、さらに「彼のこの大砲を否定して、親父の営門の大砲を肯定する」と理解することが出来る。例 10 も同様な道理で、「あの小さな花園の大きさはうちのこれの半分の水準に達していない」は「あの花園は小さい、うちのこれは大きい」を表し、さらに「あの小さな花園を否定して、うちのこれを肯定する」と理解することが出来る。

3.「不比」文

3.1. 大まかな成立プロセス

「不比」文は、現代中国語の段階で、他の比較文に見当たらない語用論的機能を持つように発展してきたために、よく脚光を浴びているが、明清期においての情況は全く異なっていた。比字文の一部として、「不比」文は当然ながら、比字文の成立プロセスにおける再解釈による影響を受けており、すなわち文法化によって、「比」という語は動詞から前置詞

へとなり、従ってその文型も汎比文より比字文へと変わったというプロセスを経験したのである。

「不比」文は漢代以降に現れた比動文の否定式③（例 11、12）に遡ることができ、「X 不比 Y」で構成され、Z は未だに存在していなかった。

11）居广艘长楫之间，则我不如子，至于安国家，全社稷，子不比我，子蒙蒙如未视之狗子耳。（说苑・杂言第十七）

［大きい船にいる間、私は（船人の）あなたに及ばないが、領地を安定させるや国を保全することとなると、あなたは私に及ばない、あなたは目がまだ見えない赤ん坊犬のようだ。］

12）其次有饵黄金法，虽不及金液，亦远不比他药也。（抱朴子・内篇卷四・金丹）

［その次に、黄金を服用する方法がある。液体状の金に及ばなくても、他の薬には遙かに上回っている。］

唐代以降、否定式の汎比文④（例 13、14）が現れ、形式上「不比」文と極めて似ているが、南宋の『朱子語類』になるまで、形容詞の Z が極稀⑤で、Z の多くは動詞性句からなり、独立句からなることさえあった。こうした状況から見れば、「X 不比 Y」と Z との結合関係が非常に緩いと考えざるを得ない。そして、こうした緩い関係によって、「X 不比 Y」と Z との間に、X または Y を繰り返して意味的空位を補完しながら文の全体意味を変えないこともできると思われる。

13）老夫不比少年儿，不中数与春别离。（全唐诗：卷 298・春去曲）

［（年寄りの）わしは若者と違って、何度も春と別れることに堪えられないわ。］

14）下惠之行，虽不比圣人合于中道，然归洁其身则有余矣。（朱子语类：论语三十）

［柳下恵の行為は、聖人が中正の道に合うことに及ばないが、自分自身に戻って身を清く保つには余裕がある。］

明代以降、否定式の汎比文が「不比」文へ移行する動向がますます明らかとなった。三言二拍の例 15、16 に示されるように、先ず Z の位置に形容詞の使用が大幅な増加を見せ、さらに「X 不比 Y」と Z との間に仮に意味的空位があっても、X ではなく Y しか補足できなくなった。言い換えれば、形式上、「X 不比 Y」と Z との結合関係が次第に緊密となってきている。

15）京邸寓中，不比在家宽转，那人又是相厚的同年，又晓得魏生并无家眷在内，直至里面坐下。（醒世恒言：卷 33）

［みやこの宿泊先の中は、実家のように広々とするのではないし、その人は仲の良い同じの合格者でもあり、魏生には妻などの家族がうちにいないのも知っているので、奥まで直進して腰を下ろした。］

16）同父道他是实学有用的，不比世儒迂阔。（二刻拍案惊奇：卷 12）

［父に言う、その人は実学で有用なもので、世の中の一般読書人が迂闊であるのとは違うと。］

清代になると、『紅楼夢』に見られた例 17、18、その下線部の意味解釈は共に二通りが出来そうになっているので、否定式の汎比文から「不比」文への移行期にあるだろうと思われる。そのうち、例 17 のほうは李云龙 2010 が「不比」文として断言したが、下線部の意味解釈によれば、否定式の汎比文に傾いたり「不比」文に傾いたりするようにしか見えないため、「不比」文が既に成立したというより、まだ成立への途中にあると考える方が妥当であろう。

17）我们这里虽不比你们的场院大，空屋子还有两间。（红楼梦：39 回）
［我々のここはあなた達の敷地が広いのと違う／我々のここはあなた達の敷地より広いわけではないが、空き屋はまた二つがあります。］

18）我久不画了。如今住的房屋不比园里的显亮，所以没兴头画。（红楼梦：109 回）
［私は長い間絵を描いておりません。今ごろ住んでいる家屋は園の中のものが明るいのと違う／今ごろすんでいる家屋は園の中のものほど明るくないので、絵を描く興味がないの。］

また、こうした「X 不比 YZ」は、『紅楼夢』と時期的にとても近い『子不語』にも一例（例 19）が見つかった。これらの意味解釈の可能性が全く同じという意味では、「不比」文はこの時期にそろそろ成立してくると考えても良いだろう。

19）淫媟虽非礼，然男女相爱，不过天地生物之心。放下屠刀，立地成佛，不比人间他罪难忏悔也。（子不语：卷 10・妓仙）
［男女の不正当な関係は礼法に合うものではないが、男女が愛し合うことは、天地の生き物達の心に過ぎない。改心さえすればたちどころに善人になるので、人間の他の罪が懺悔しにくいのと違う／人間の他の罪より懺悔しにくいわけでもない。］

それ以降、現代中国語のものと全く変わりのない「不比」文はやっとしばしば見られるようになった（例 20、21）。『海外扶余』は清晩期の文献なので、「不比」文の成立は遅くとも清晩期以前だと推定できる。

20）他是什么人！又不比我大，又不管辖着我，为何却能向我调兵？（海外扶余：8 回）
［彼は何者だ！私より偉いわけでもないし、私を管轄しているわけでもないのに、どうして私に軍隊の移動を命令できるか？］

21）城上旌旗虽比往日较密，守兵却不比往日的多。（海外扶余：10 回）
［城壁の上の色とりどりの旗はいつもよりびっしりとなっているが、守備の兵士は却っていつものより多いわけではない。］

3.2. 文法特徴

「X（不）比 YZ」という形式をどの文型として認識すべきかについては、否定式片方の問題ではない。単なる一文について、比動文か、汎比文かそれとも比字文かを判断する根拠として、3.1.に触れた Z の存在や否や、Z が句かそれとも形容詞か、「X（不）比 Y」と Z との結合関係が緊密であるや否や、および「X（不）比 Y」と Z との間に意味的空位が存在

するや否や、存在した場合では如何に補うかなど、の文法特徴以外、実際には「比」という語の品詞性は最も重要な要素の一つなのである。

「比」という語が本來の動詞より文法化して前置詞となってこそ、初めて比字文の正式な成立を示せるようになった。この筋道について、黄晓惠 1992 は意味的重心の確定を通して、最も説得力のある論述を提示した。要するに、ただ「比」という語が前置詞として働き始めてこそ、文型の意味的重心は初めて後ろの Z までの移動が実現でき、従って「X (不) 比 Y」と Z との間に存在していた意味的空位もついでに消失して二度と現れなくなったのである。

3.3. 意味類型と意味パターン

3.3.1. 所謂三つの意味類型

谢仁友 2006 は「X 不比 YZ」という形式によって表示される可能な意味類型を、差異を陳述する、格差の陳述するおよび格差を否定するという三種に分けた。そのうち、差異を陳述する際、文の意味は「X は Y と異なる (X≠Y)」となり、「比」は動詞である。つまり、差異を陳述する時の文型は決して本当の意味での「不比」文ではなく、むしろ否定式の汎比文の一種と見なすべきである。それに対して、格差を陳述する際、「比」は前置詞であり、文の意味は「X は Y に達していない (X<Y)」となる。格差を否定する際、「比」も前置詞であるが、文の意味は「X は Y とほぼ同じ／同じ (X≈／＝Y)」となる。単に文の意味から見れば、意味類型が異なるにもかかわらず、格差を陳述する文型と格差を否定する文型は共に「不比」文である。

しかし、明清期以前までに、否定式の汎比文が差異を陳述するには、ただ「X 不比 YZ」という形式一種だけではなかった。何故そうなっていたかと言うと、Z の大多数は「X 不比 Y」から遊離していたからである。例 15～18 に示されるように、「X 不比 YZ」という形式は否定式の汎比文が間もなく「不比」文へと変わろうとする、つまり、「X 不比 Y」と Z との結合関係がますます緊密になってくる時にやっと優位を占めるようになって、その後さらに普及し、そして最終的に固定してきたのである。

一方、明清期の「不比」文が表しているのは格差を陳述するかそれとも格差を否定するかという点について、例 17～21 に基づいて正確な判断を下すのはちょっと難しいようである。これら五例の「不比」文はどの意味類型を表すとしても、文脈全体の基本的な意味があまり変化しないのはそう思われる主な理由である。これについて、李云龙 2010 も格別な注意を払い、例 17 の意味をより詳しく説明した。その際に、わざと格差を陳述すると格差を否定する両方に配慮を加え、話し手の王熙鳳が聞き手の劉姥姥に対して遠慮がましいことを言い、相手のメンツへの配慮目的を巧妙に達成する、という語用論的効果を強調した。例 19～21 も類推できる。例えば、例 20 は「守兵没有达到往日的数量［守備はいつもの数に達していない］／守兵的数量跟往日差不多［守備の数はいつものと殆ど同じだ］」のどちらとして理解しても問題はない。以上により、少なくともこの時期の「不比」文の用例に

関して、特に意味類型の区分にこだわる必要がないと考えるべきである。

3.3.2. 二つの意味パターンの優位交替

ここで、「X を肯定して Y を否定する」と「X を否定して Y を肯定する」という二つの意味パターンを利用して「不比」文を分析しようとする問題の捉え方は、张全真 1996 より示唆を受けたものである。

「不比」文はその成立プロセスにおいて、先ずそれ以前の否定式の比動文を継承し、それから途中に否定式の汎比文のことをも経験したので、二つの意味パターンとも保ってきたが、用例全体の数的変化に見られる優劣の情勢が根本的に変わってしまった。张全真 1996 が統計した『元曲選』の否定式の比動文合計 41 例のうち、「X を肯定して Y を否定する」と「X を否定して Y を肯定する」はそれぞれ 36 例と 5 例となっている。王周明 2015 が統計した三言二拍の否定式の汎比文合計 11 例のうち、「“X を肯定して Y を否定する」と「X を否定して Y を肯定する」はそれぞれ 4 例と 7 例となっている。また、これまでに既に見つかった 4 例の「不比」文のうち、「X を肯定して Y を否定する」と「X を否定して Y を肯定する」はそれぞれ 1 例と 3 例となっている。統計学的観点から見れば、上記の数値に示された用例の数量上の逓減は確かにここの論述の説得力を弱めてしまったが、優劣勢の逆転変化という傾向性はある程度には見えてきたとも言える：比動文から「不比」文まで発展してくると、「X を肯定して Y を否定する」という意味パターンが優位から劣位に転落するのに対して、「X を否定して Y を肯定する」という意味パターンは却って劣位から徐々に優位に立つようになる。

決して偶然ではないが、否定式の汎比文にせよ、「不比」文にせよ、「X を肯定して Y を否定する」という意味パターンの用例には、例 16、19 に用いる「迂阔／难忏悔」のように、全体的に消極的な意味の形容詞を使用する傾向が見られる。それに対して、「X を否定して Y を肯定する」という意味パターンの用例は、例 15、17、18、20、21 に用いる「宽转／大／显亮／大／多」のように、積極的な意味の形容詞使用する傾向を見せている。

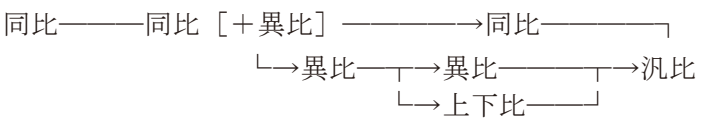
清代の言語資料にははっきりとなっていないが、実際に、「X を否定して Y を肯定する」という意味パターンの「不比」文は既に上り坂を進めつつあり、「X を肯定して Y を否定する」という意味パターンの「不比」文も下り坂を進行中であった。現代中国語の予期に反するという語用論的機能を有する「不比」文の広範囲にわたっての使用はまさにその最適の証拠となっている。相原茂 1992 と吴福祥 2004 とも、現代中国語の「不比」文は意味上「X を否定して Y を肯定する」を表すと指摘した。この指摘も間違いなく、現代中国語の「不比」文と明清期の否定式の汎比文と「不比」文との受け継ぎ関係を証明していると言えよう。当時において、予期に反するという語用論的機能は未だにできていなかったが、問題の捉え方を変えて考えて見ると、こうした情況は清代以降、「不比」文は更に発展しつつあって、ついに今日の語用論的機能を持つように辿り着いた、という筋道の間接的な証拠として見ても良かろう。

4. 明清期の「没有」比較文と「不比」文の位置付け

4.1. 比較文の発展プロセスにおいての位置付け

如何にしてその成立ができたかどうかを確認する点について、「没有」比較文は明らかに「不比」文より簡単明瞭である。王周明 2006 は、「有」字比較文は、かつて長期にわたって盛んに使用されていた「如／若／似」字比較文の急速な衰弱、「比」字比較文の再解釈に伴う更なる発展、及び互いに緊密な関係を持つ「有」字測量文からの影響、という環境の中で多様な刺激を受けて登場してきた、と述べた。それに、「有」字比較文の内部情況から見れば、「没有」比較文の出現は比較文の発展プロセスの一環に過ぎず、比擬を含意する同比の雛形より利益を受けてから、比擬の意味合いを完全に排除する肯定式の「有」字比較文が現れるまで助力していた。しかし、たとえこのようであっても、肯定式の「有」字比較文が同比を表し、否定式の「有」字比較文――「没有」比較文が負の差比を表すという関係は一定不変のものである。

「比」字比較文はその発展プロセスにおいて、ほぼ全部の比較範疇とも関係を持っており、しかも数度も変化していた。図示する比動文から汎比文までの情況からもおよその見当は付ける（王周明 2014 を参照）。



肯定式の比字文は、『西遊記』の中の比擬を含意する「这场祸，比天还大。(5 回)［この禍は天よりもさらに大きい。］」と「我日间与那太子夸口，说我的手段比山还高，比海还深。(38 回)［私は日中あの太子に法螺を吹き、自分の手段は山よりさらに高い、海よりさらに深いと言いました。］」によって立脚地を獲得し、明清期になるとさらに「如／若／似」字比較文に取って代わり正の差比を表す最も重要な形式となった。それに伴い、「不比」文ももう少し後で次第に安定してきた。ただ早期の「不比」文は、意味類型の曖昧性に連れられて、その比較範疇も負の差比を表すかそれとも同比を表すかをとても定めにくいので、むしろ意味パターンを用いて説明する方がより納得できると思われる。

4.2. 意味上の重なり合いまたは対立の有り様

「不比」文と「没有」比較文の両者の早期用例にとって、Z が積極的な意味の形容詞からなり、意味パターンが「X を否定して Y を肯定する」であった時、「不比」文は「没有」比較文を包含することができており、両者の意味上の重なり合いの確率は非常に高かったのである。その上に、正負の差比の比較範疇の概念的対照が鮮明なので、大ざっぱに「没有」比較文を比字文の否定式と見なすにも非難する余地はない。しかし、「没有」比較文は実質上「有」字比較文の否定式に過ぎないため、やはり「不比」文と肩を並べることがで

きない。つまり、「没有」比較文は「不比」文に自分との意味上の重なり合いを逆要求することができない。

最後に、否定式の汎比文と「没有」比較文との対句用例を通して、両者の意味上の対立情況を改めて推定してみる。

22）……只为自家要说那“三孝廉让产立高名”。这段话文不比曹丕忌刻，也没子建风流，胜如紫荆花下三田，花萼楼中诸李。（醒世恒言：卷 2）

[…ただ自分自身がその「三人の孝廉が財産を譲り合って高名を立てる」を語ろうとするためだ。このひとくさりのお話しは曹丕が嫉妬深くて過酷であるのと違い／曹丕より嫉妬深くて過酷なわけでもなく、曹植ほど文才が優秀でもないが、ハナズオウの下の田氏三兄弟のお話しと花萼楼の中の唐玄宗六兄弟のお話しよりも優れている。]

例 22 の「不比曹丕忌刻」と「也没子建风流」とは対句となり、「不比」と「没（有）」はそれぞれ消極的な意味の形容詞「忌刻」と積極的な意味の形容詞「风流」と組み合わせて、互いの意味パターン「X を肯定して Y を否定する」と「X を否定して Y を肯定する」との対立も明らかである。この時期に、ちょうど汎比文が「不比」文へと変化し始めたばかりで、この用例は Z の意味上の消極性または積極性という性質を利用して、「不比」文と「没有」比較文との意味上の対立の先駆けと見なしても良かろう。

〈注釈〉

①X=比較前項、Y=比較後項、Z=比較説明項。以下同様。

②うちの例 6 は原文の文脈および文の流れ（すなわち西門慶と応伯爵との対話）に基づいて考えると、下記の二点はやや特殊である。一つは否定に相当する反語文の形式を取る。もう一つは、比較後項 Y に相当する「这黑黑的团儿=衣梅」は出現しておらず、文脈に沿って補足が可能なので、再現できた原文の完全な形式は「糖肥皂那有这黑黑的团儿／衣梅这等好吃[砂糖漬けのサイカチがこの真っ黒な砂糖漬けの丸いやつ／梅の実ほど美味しいわけがない。]」だと思われる。

③先秦の文献の中にすでに比動文が現れたが、肯定式のみであった。例えば、「不救火者比降北之罪，逐兽者比入禁之罪。（韩非子：内储说上）[火事を消そうとしない者は敗戦して投降したり逃走したりする罪同然、獣を追う者は立ち入り禁止地区に入る罪同然。]」否定式の比動文の用例は、現時点で漢代以降の文献にしか見つかっていない。

④六朝の文献の中にすでに汎比文が現れたが、肯定式のみであった。例えば、「明帝问周伯仁：‘卿自谓何如郗鉴？’周曰：‘鉴方臣如有功夫。’复问郗，郗曰：‘周顗比臣有国士门风。’（世说新语：品藻）[明帝は周顗に聞く、あなた自身は自分と郗鉴のどっちが強いと思うかと。周顗は言う、郗鉴はわたくしより技と力があるようだと。また郗に聞くと、郗は言う、周顗はわたくしと比べて、彼の方が国士の家風を有すると。]」否定式の汎比文の用例は、現時点で唐代以降の文献にしか見つかっていない。

⑤先行研究によく引用された『朱子語類』の「‘变化’字，且只大概恁地说，不比系辞所说底子细。（易四）」という一例、Z が形容詞「子细」からなるのは確かである。しかし、王周明 2015 によると、この 1 例のみに対して、Z が動詞性句、さらに独立句からなる 8 例もある。やはりこの一例が特殊だと考えざるを得ないだろう。

〈参考文献〉

黄晓惠 1992「现代汉语差比格式的来源及其演变」,『中国語文』1992 年第 3 期 pp. 213-224。
李云龙 2009「陈述差距与否定差距的不比句的来源刍探」,『現代中国語研究』第 11 期 pp. 56-63。
石毓智・李讷 2001『汉语语法化的历程』, 北京大学出版社。
王周明 2006「明清期における「有」字比較文の成立」,『中国語学』第 253 号 pp. 192-212。
王周明 2014「试论泛比句对比动句的承继关系及比较说明项的演变」,『GR—同志社大学グローバル地域文化学会紀要—』第 2 号 pp. 75-88。
王周明 2015「“不比”句成立过程试探」,『中国語研究』第 56 号 pp. 94-106。
吴福祥 2004「试说“X 不比 YZ”的语用功能」,『中国语文』2004 年第 3 期 pp. 222-231。
相原茂 1992「汉语比较句的两种否定形式——“不比”型和“没有”型」,『语言教学与研究』1992 年第 3 期 pp. 73-87。
谢仁友 2006「“X 不比 YZ”三种语义类型的历史来源」,『古汉语研究』2006 年第 4 期 pp. 21-27。
袁宾・徐时仪・史佩信・陈年高[编]2001『二十世纪的近代汉语研究』太原：书海出版社。
张全真 1996「『元曲选』中的差比句」,『南京大学学报：哲学·人文科学·社会科学』1996 年第 4 期 pp. 166-170。
张豫峰 1998「表比较的“有”字句」,『语文研究』1998 年第 4 期 pp. 12-17。
张赪 2004「明代的差比句」,『語言暨語言学』第 5 卷第 3 期 pp. 705-725。

〈付記〉

本研究の初稿は執筆言語が中国語のもので、2015 年 11 月東京大学開催の日本中国語学会第 65 回全国大会にて口頭発表し、『日本中国語学会第 65 回全国大会予稿集』に収録されている。今回の執筆に当たって、執筆言語を日本語にするだけでなく、初稿のもとで、一部の内容に対して大幅な修正を行った。